

史通の六家二體の論に就て

内 藤 戊 申

緒 言

さきに私は東洋史研究第二卷第一號に於て「鄭樵の史論に就て」といふ論文を發表した。そして其の緒論中には支那の三大史論家劉知幾、鄭樵、章學誠の中先づ鄭樵を取り上げたものであつて、近い將來に於て他の二者の所論を檢討し、然る後に此の三者の綜合的研究を試みる積りである旨を述べて置いた。本篇は即ちいはゞ此の三部作の第二部を成すものであるわけだが、實は順序から言へば先づ第一に劉知幾を問題にすべきであつて、私が鄭樵を先にし、劉知幾を次にしたのは單に自分の都合でさうしただけで別に深い意味があるわけではない。

支那の史學は唐宋時代に於て一つの轉換期を形づくつて居ると言へる。といふよりは寧ろ史學は唐宋時代に於

て始めて學問として獨立の地位を確保したのであると私は考へる。唐初の作である隋書經籍志に書籍を分類して經史子集の四部とし、始めて史書を子集の前に列した如きはその好個の例證であると言へやう。^①劉知幾の史通はこの轉換期の初頭に於て最も重要な意味を持つて居る。

史通の書は劉知幾の時代以前の史學に對する綜合的な回顧であり、同時にその回顧によつて己れの立つべき位置を十分に自覺し、その理想とすべき體制を確立して以て後人の依るべき道を示したといふ先驅的意義を持つものである。史通の外篇に史官建置の篇を設けて過去の歴史を編纂の沿革を述べ、古今正史の篇を設けて過去の歴史を一々批評したのは即ち回顧の意であり、内篇に説く所は^②全て彼の理想とする歴史の體制に關する詳細であると私

は考へる。而して内篇の初にある六家二體の二篇は内篇全體の序論の如きものでその理想的體制の由て來る所以を述べたものであらうと思はれる。

本篇に於て史通の諸篇の中、特に六家二體の二篇を私に取り上げて問題にするのは一つには史通全體の研究は到底この小論文の能くする所でないことにもよるが、この二篇こそ史通の書全體の立場を最もよく表はして居るものであつて、この二篇の意を理解することは結局劉知幾の言はんと欲する所の要點を知ることになるからである。前に鄭樵を論じた時にも述べた如く私は昔の歴史家の歴史に對する立場を知る爲に支那の史論を研究せんとしてゐる者である。史通の内篇に説く所は、六家二體を除く外、全て劉知幾が己れの是とする方針に基いて、歴史編纂の實際的な方法論の詳細を示したものである。言ひ換へれば彼の立場に立つ者にして始めて問題になる事柄である。然るに私に取つて先づ必要なのは彼の立場が如何にあるかといふことである。必ずしも直ちに彼の立場を是とし彼の立場に立つて彼の説く所の詳細を云々

しやうといふのではない。即ち私が本篇に於て先づ六家二體のみを問題にし、他の諸篇に至つては之を他日に俟たんとする所以である。

註 ① 書籍を分類して四部とすることは必ずしも隋書經籍志に始まつたわけではない。又四部の中、史書の爲に一部を設けたのも隋書が最初であるわけではない。晉の荀勗は甲乙丙丁の四部に分ち、史書を第三番目に持つて來てゐる。その他の人々は多く劉勰の七略に倣つて七つに分類し、阮孝緒の七錄の如く記傳を經典に次いで第二番目に持つて來て居る者もある。隋書の分類法は荀勗の方法に則つたものであるとはいへ、重要なことは數ある分類法の中から荀勗の法を採用したこと及び史部を意識的に第二番目に持つて來て子集より重んじた點に意味があるのである。(王鳴盛、十七史商榷卷六十七經史子集四部)

② 史通の史官建置、古今正史の二篇を以て劉知幾の時代より以前の史書全般に對する回顧であるとするのは實は必ずしも當を得た見方でないかも知れない。彼の重んずる所は私撰の史でなく官撰の正史である。章學誠の所謂館局の纂修である。従つて史官の沿革を述べ、古今の正史を説くのは結局彼に必要な事柄を主として言つたものであるとも言へる。史學史の實狀は、唐以

前にあつては寧ろ歴史は私撰の時代であつて官撰の歴史の盛になつたのは唐以後のことに屬する。従つて唐以前に就ていふ場合、正史を主として言ふのは全體を盡さない恐れがないとは言へない。併し乍ら實際に劉知幾の文を見るに必ずしも官撰のもののみに限らず前單乍らその他の私撰にも言及して居り、且又正史以外の史書に就ては内篇雜述篇に詳しく述べて居る事等から考へて私ば之を廣い意味の回顧であり、史學史であると思ふと見やうとするのである。

一 史通の諸研究

史通の書に對する批評は既に劉知幾の當時からあつたらしいが古いものは今日残つて居ない。鄭樵の通志に劉知幾を譏つた文などがあるが勿論研究と言ふ程のものではない。

今日吾々が見ることの出来るのは明以後の諸書である。明人の書としては陸深の史通會要、李維楨・郭孔延の史通評釋、王維儉の史通訓故等があり、清朝の著には黃叔琳の史通訓故補、浦起龍の史通通釋、紀均の史通削繁等がある。今日最も重んぜられて居るものは史通通釋史通削繁の二書である。その他四庫全書總目提要の史評

類の眞先に史通と史通通釋を掲げて居り、又章學誠は文史通義外篇に「讀史通」の一篇を設けて居るのみならず章氏遺書全部を通じて劉知幾の名は到る所に散見し得る。

近頃の學者では私の知つて居る所では傅振倫といふ人が劉知幾の研究を熱心になつて居るらしい。その著に「劉知幾之史學」劉知幾年譜がある。又呂思勉といふ人の「史通評」なるものがある。

我國では故田中萃一郎博士の「劉知幾の歴史研究法」といふ論文がある(田中萃一郎論文集所收)。亡父湖南博士も曾て「擬策一道」の中に劉知幾を論じたことがある(支那學第六卷第四號所載)。史通の内容一般の紹介や批評は殆んど以上の諸書に盡きて居ると言へる。史通の内容や此等の諸書の一々を紹介することはこの小論文の目的ではないから全て之を省略し、ここには唯史通通釋に就て一言するだけに止めたい。

今日吾々が史通を讀むといへばそれは史通通釋を讀むことであるといつてもいい位史通通釋はよく行はれてゐる。所が史通通釋の刊本は皆その釋を史通の本文の間へ

註の如く割つて入れて居る。それが又親切を極めた割註であるので讀者はこれを讀まずにすまずよりは讀んだ方が確に便利なことが多い。それと同時に讀者は不知不識の間に史通を浦起龍の解釋に従つて讀んで了ふ。蓋し之は勢の當然である。が、併し一方から言へば非常な危險を冒してゐることになる。例へば後に論ずる二體に就て言ふと、浦起龍はこの二體を一も二もなく編年體と紀傳體の二體であると決めてかゝつてゐる。所が史通の本文にはさうであるとはどこにも書いてない。唯六家の中祖述すべきものに左傳家と漢書家の二家があると言つてゐるだけである。實際上左傳は編年體であり、漢書は紀傳體であるから浦起龍の考へは間違ひであるとは言ひ難い。併しそれだけに讀者はつい釣り込まれて通釋の考へによつて史通を讀んで了ふ結果になるのである。この二體に就ては本論に於て詳しく述べる積りであるが、かういふ有様だから私自身は努めて通釋に引きつられない様に注意し乍ら史通を讀んで見た。通釋の考へを一途に排するといふのは勿論ない。唯通釋は飽くまで後世の清

朝人の考へであつて、決して唐の時代の劉知幾の考へを全然劉知幾の立場に立つて敷衍したものではないといふことを念を押して言ふに過ぎない。

註① 史通内篇六家の篇末に「尙書等四家其體久廢。所可祖述者唯左氏及漢書二家而已」とある。六家の次の二體の所でも本文中にこの二體が史體としての編年體紀傳體のことであるとどこにも書いて居ない。それかといつて編年とが紀傳とかいふ文字は後世の述語であつて劉知幾は未だそんな言葉を知らなかつたのだとは言へない。この二語は史通の本文の到る所に出て来る。

二 六家の内容

議論を進める便宜上煩を厭はず六家の内容を先づ掲げる。六家は即ち尙書家・春秋家・左傳家・國語家・史記家・漢書家をいふのである。六家の家の字に就ては多少説明をする必要がある。劉知幾は六家を述べるに際して一家毎に必ず後世の類を同じうする者を並べて居る。即ち家は今日の所謂流派の如きものであると解せられる。而して注意すべきことは劉知幾が六家を數へたのは後世にその流派の見るべきものがあつたもののみを取り上げて六つ並べたのであつて、普通支那人が好んでする如く修辭

的な意味で六つ並べたのでもなければ、唯漫然と實在する古い史體を數へ上げたのでもないといふ點である。

この六家に就ても通釋は尙書家を記言家也とし、春秋家を記事家、左傳家を編年家、國語家を國別家、史記家を通古紀傳家、漢書家を斷代紀傳家也として、ことさらに自分の概念にあてはめて解釋してゐる。これ等の概念は成程一應は六家の特質を表はして居る様に見えるが、^①私は努めて浦起龍の概念に拘泥することをせず、六家の内容を唯史通の本文だけに就て要約することにする。

〔尙書家〕其の載せる所は皆典謨訓誥誓命之文なりと言ひ、尙書の中でも堯舜二典の如く人事を述べたものや、禹貢の如く地理を言つたもの、洪範の如く災祥を述べたものや、願命の如く喪禮を説いたものの如きは例の純ならざる者であるとする。この類に屬するものには古くは周書があり、後世では晉の孔衍の漢尙書、後漢尙書、魏尙書、隋の王邵の隋書等がある。併し乍ら尙書の如きものは書物の少い昔にあつてこそ存在價值があるが今日の史體としては不完全極まるものである。之を後世に於てそ

の儘真似した孔衍や王邵の書が世に行はれないのは良に當然のことである。

〔春秋家〕春秋家の起源は孔子の春秋よりも古く、例へば夏殷春秋、晉春秋等の名が古書に見えて居るし、この他にも隱没して了つた者も多いだらう。古いもので春秋と類を同じうするものに竹書紀年があり、所謂晉の乘、楚の檮杌等も皆春秋の別名である。孔子の春秋は興敗によつて功罰を明にし、日月を假りて歴數を定め、其の文を晦にして不刊の言を爲し、將來の法を著はすものである。又事を以て日月に繋げるのがその特長である。この點からいへば管晏(晏子春秋)臧卿(臧氏春秋)呂不韋(呂氏春秋)陸賈(楚漢春秋)等の春秋は名は春秋だが年月に繋けてゐないから孔子の春秋とは異なるものである。史記の本記は一見春秋に法つてゐる様であり、後の國史も皆この法を用ひてはゐるが、その内容に至つては褒諱點陟が殆んどなく唯故事を整齊したに過ぎないのだから之を春秋に比することは出来ない。

〔左傳家〕左傳家の起源は左丘明の春秋傳である。左傳

は必ずしも經文と一致してゐないが其言は簡にして要、

其事は詳にして博、まことに述者の冠冕である。左傳の後この體を襲ふものは絶えてなかつたが晉に至つて樂資が春秋後傳を作つた。又名前は或は違つてゐるが左傳に倣つて編年體の國史を作つたものに荀悅(漢紀)、張璠(後漢紀)、孫盛、魏氏春秋、晉陽秋)、干寶(晉紀)、徐賈(裴子野(宋略)、吳均(齊春秋)、何之元(梁典)、王邵(北齊志)等がある。

〔國語家〕之も起源は左丘明であつて、彼は春秋左傳の外に周魯齊晉鄭楚吳越八國の爲に春秋外傳國語を作つた。次に之に類するものに戰國策がある。後孔衍は春秋時國語及び春秋後語を作つた。之は左丘明の春秋傳でなく國語に倣つたものである。司馬彪の九州春秋も其體統からすれば近代の國語と見看すべきものである。五胡十六國の世の如き時代には當に國語の如き體を用ひて然るべきであるのに、實際は各國所在の史官は多く班馬に倣つて紀傳を作り、或は荀悅・袁宏に擬して編年の史を作つた。之は即ち史漢の體が大に行はれて、國語の風が衰

へたことを意味して居る。

〔史記家〕其先は司馬遷より出てゐる。史記は上は黃帝より下は漢の武帝に及び、紀傳書表を設けた。是以後前漢より後漢にかけて史官の續ぐ所皆史記を以て名づけた。後世では梁武帝勅撰の通史及び北魏の濟陰王暉業(實は崔鴻等撰)の科錄、並びに唐の李延壽の南北史があつて皆史記の流である。史記の體は紀傳書表に分れてゐる爲に一つの事や關係ある事柄が方々に別れ別れになつて了つてその間に聯關がない、且舊記や雜言を多く採聚してゐる爲に語の重出せるものが少くない。之は史記の缺點である。後の通史以降は特に蕪累なること甚しい。且又(通史や科錄は)出來上つてから間もなく殘缺が澤山生じたし、(又南北史は)學者をしてこの本ばかり讀んで別の新しい著書を讀むのを怠らしめたりなどして甚だ感心しないものである。

〔漢書家〕其の先は班固より出てゐる。之は漢の高祖から王莽までの事を述べたものである。後漢以後の史家は皆漢書の名を襲つて歴史に書の字を附けた。東觀漢紀

と三國志のみは例外であるが其の體制はやはり同じである。史記以前の史は或は累代連擧し、或は一代を完うしてゐないが、漢書は前漢一代の首尾を完うして一書を成してゐる。又其の言は精練、事は該密である。故にこの體は今日に至る迄改むる事なく續けられて來たのである。之を要するに尙書等四家は其體久しく癡れて了つた。

今日祖述すべきものは左傳漢書の二家のみである。

以上が大體史通の本文である。以下之に基いて多少の考察を試みる。

註① 浦起龍の六家の解釋の中、春秋家を記事家とし、左傳家を編年家とするのは必ずしも適切な考へといふことが出来ない。何故ならば編年といふ點では春秋も左傳も同じく編年であり、又記事といふ點では春秋よりも寧ろ左傳の方が一層記事的であるとさへ言へる。之は要するに強いてこの六家を一語に言ひ換へ様とする形式主義の弊害の表はれであらう。

私の父はその史學史稿に於て春秋左傳二家の區別に就て次の様なことを言つてゐる。「劉知幾が春秋家と左傳家とに分てるは、左傳は單に編年なるのみならず、編年の上に種々の事實を書くといふ點にての區別にて、春秋の如く編年と褒貶の意味を有するものと異なる點に

て區別せる也」と。併し乍ら私は必ずしもこの考へにも賛成出来ない。私自身は劉知幾はこの六家をそんなに内容的な特質によつて分類したのでなく、春秋家は後世春秋の名を附する者が多く現はれたので之を一家として擧げたのであり、左傳家は彼の二體の一つに入らなければならぬ位彼にとつて重要なものであるから勿論之を擧げないわけにはいかなかつたのであらうと考へる。春秋は特に褒貶を重んずることをその特徴とするといふ風な理屈は春秋家を設けることにしてから後につけたものであると思はれる。

② 史通通釋に徐賈は隋書經籍志に晉紀五十卷の著者として出てゐる徐廣の譌であるとしてゐる。

③ 隋書經籍志の史部には劉知幾が擧げたもの以外にも春秋の名を附した書が十許り見えて居る。

④ 史通通釋に濟陰王暉業の著は辨宗錄であつて、科錄は北魏の常山王遼の曾孫暉が儒士崔鴻等を招いて作らしたものであるとて史通の誤を指摘して居る。

三 六家の分類に就て

先づ第一に問題になるのは劉知幾が何故六家なるものを設けたか、又如何なる標準から史書を六家に分けたかといふ點である。此の問題が私の最も知りたい所である。所がこの事に就ては劉知幾は卷頭に「古往今來。賈之遞

變。諸史之作。不恆厥體。權而爲論。其流有六。」とて六家の名を擧げてゐるのみで本文中どこにも自分の方針を明示した文句は見當らない。従つて吾々は彼の敘述の間から彼の意を探し出すより他に仕方が無い。

史通通釋はこの六家の意味を顯説して記言家(尙書)記事家(春秋)編年家(左傳)國別家(國語)通古紀傳家(史記)斷代紀傳家(漢書)の六つに言ひ換へた。「記言」「記事」「編年」「紀傳」等の文字はいづれも史通の本文中にも見える文字であるから浦起龍のこの名づけ方は必ずしも全く根據のないことではない。又記事家、編年家の二つを除けばその名のつけ方は大體各家の特質を相當よく表はしてゐると思はれる。併し乍ら浦起龍は自分でも言つてゐる如く之は單に六家の意味を顯説しただけの話であつて六家の設けられた所以や其分類の方針を別の言葉で言ひ表はしてゐるものと言ふことは出来ない。

私の考へでは緒言にも少し言つた様に、劉知幾が六家を設けたのは全體としては自分の理想とする歴史の體制――之は最も漢書に近い――の存立を根據づける爲に從來の

史書を見わたして之を整理して並べて見たのである。従つてその分類法自身に何か別の價值觀念を必要ともしないし、分類法自身が論理的に整然と概念づけられる必要もない、要は彼の史體が歴史的に言つても根據があるといふ事を示すことが出来ればいいのである。唯彼は仲々の形式主義者であるから分類をしたからにはある程度の理窟をその分類につけて、形式を整へて見たいと思つたであらう。之は勿論彼に限らず誰しも考へさうなことがある。かくの如き々の意圖の限りに於て史通の内篇は仲々順序よく組み立てられて居る。即ち先づ從來の史書全部を大きく六つに分け、而もその分け方は史書の體制といふ點に目安を置いて分類されてゐる。次にその六つの中から自分の好む所のもの二つを撰んで二體として、この二體の長所を盡したものが自分の史體であるといふわけで以下自分の史體の形式を詳細に述べたのである。

然らば劉知幾は何故斷代の紀傳體である漢書の史體を最も理想に近いものとして選んだかが問題になつて來る。これは一言にして言へば時代がさうさせたのであつ

て、かの鄭樵や辛學誠の如く時代の風潮を超越して純粹に自分の頭から割り出した方針を以て史書を編むといふ

風は劉知幾に於ては比較的少いと思はれる。緒言に於て言つたのは別な意味に於て唐代は史學に一大變化を來した時代である。即ち唐以前に於ては史書は私の著述であり、専門家の學問であつた。殊に著しい特長は史學が多く家學であつたことで、父子兄弟相繼いで一つの史書を著はした事もその例に乏しくない。所が唐初に至つてこの風は一變して晉書隋書の出來た時から史書が天子の勅命によつて編纂され、その編纂に従事する人も一人ではなく多くの學者が仕事を分擔する分纂の法を採る様になつた。^②即ち辛學誠の所謂私の著述から館局の纂修に變つたのである。晉書隋書は唐の太宗の時に出來たのであるが劉知幾はその時代に次ぐ高宗より玄宗に亘る時代の人であるから恰もこの史書官選の風の起つて來る時代の人である。而も彼自身も國史の纂修に與り、動もすれば自分の意見が人々に用ひられないので遂に憤慨して作つたのが史通なのである。彼の頭を占める史體が當時殆ん

ど不動のものとして行はれた斷代の紀傳體を一步も離れることが出來なかつたのは眞に無理からぬ所である。

私は少しく結論を急ぎ過ぎたが私が、六家の設けられた事に就て上の如く考へるのは決して理由がないのではない。史通通釋の如きものに煩はされることなしに平靜な心で史通の本文を讀めば誰でもが極めて自然に私の様に考へるだらうと思はれるが、實際に於て傅振倫氏の「劉知幾の研究」も呂思勉氏の「史通評」も田中博士も私の父も多かれ少かれ通釋の影響を受けて浦起龍の態度を是認して居るので私は自分の考へ方を明にする爲に次に少しく例證を挙げたい。

理由の第一は劉知幾が六家を設けたこと及びその分類の方針に關して何も理論的な説明を加へてゐないことである。載文篇以下彼の歴史の體制を論じた箇所では一々相當理論的根據を擧げてゐる様な理窟好きの彼が最も重要な六家二體に於ては殆んど理論らしい理論を述べてゐないのはとりも直さず此箇所に於ては彼に統一的な理論がない事乃至は理論の必要を認めなかつた事を物語る

ものではなからうか。而して巻頭に唯一言「論史之作。權而論其流云々」といつてゐるのを素直に解釋して昔からの諸史を流派に分つて見るとかうなるといふことだけ解すべきではなからうか。

第二に六家の各項に於て彼は必ず各家の起源とそれを祖述するものを説いてゐる。而もその起源に近い時代に於てその體を繼いだ者とすつと後世になつて之を祖述したものとを分けて述べてゐる。之は各々の家がその出来た當時に於て、乃至は後世に於て、その存在價值があつたかどうかといふことを意識的に分けて考へたものであり、昔行はれても後世そのよき祖述者のない様なものは現代に於て存在價值のないものであるといふ彼の思想を裏書きしてゐるものと思ふ。

六家の一々に就て言へば尙書家は文籍の少かつた古代に於ては史體として意味があるがその後之を繼ぐ者がないのは後世文籍が備つて來ると尙書の如き體は到底完全なる史體として認めることが出來ない。故に後世之を眞似た孔衍の漢魏尙書や王御の隋書等は世に行はれないの

も尤もであるとしてゐる。この尙書家と次の春秋家とは劉知幾自身はその後世に於ける存在價值を認めなかつたのだが實際に於て之等を擬した者が後世出てゐるので止むを得ず之が爲に一家を設けたのであらうと思はれる。但し彼は尙書の如き内容も史體の一部としては必要であると考へて載言篇を設けて書部(志部の意)に制作章表書なるものを設けるべきであると言つてゐる。因にこの載言篇を紀均の史通削繁では全部削つて了つたのは私の解し難い所である。

春秋家では春秋は春秋時代に盛に行はれた史體であるらしいが今日残つてゐるのは孔子の修めた魯の春秋だけである。後の晏子・虞卿・呂氏・陸賈等の春秋は事を日月に繋げてゐないから眞の春秋の體ではない。司馬遷の史記の本記も春秋に法つてはゐるがその精神に於て春秋の如く褒貶を旨としてゐないとしてゐる。後世春秋の名を附して現はれた書は多いのであるが彼は之を全部左傳家の屬としてゐる春秋の後をついだ者はないのだといふ積りらしい。之などは春秋の體が昔行はれたけれども後に

續ぐ者がないから自分には餘り必要がないのだといふ態度をよく表はしてゐるものと思はれる。

左傳家は左傳の後この道が絶えてゐたが後漢の荀悅以後編年體で國史を書くものが續出した。名前は違つてゐるが此等は皆左傳の流であるとしてゐる。併し乍ら之は聊か勝手な話で單に編年體といふ事だけなら春秋も編年體であつて何も特に左傳を探る理由がない。名前から言つても春秋の名が襲はれてゐるのである。春秋の項に彼が述べた如く春秋は褒貶の意が多過ぎて^④歴史の體には適しないといふのなら左傳の項に於て左傳は褒貶の意がないから後世に行はれたので従つてこの方がいい、のだといふ事を主張すべきである。所が劉知幾はそんな事は一言も言つてゐない。結局春秋家と左傳家の劉知幾の區別は頗る曖昧である。浦起龍も一寸困つていゝ、加減に春秋は記事家、左傳は編年家だとして置いたのだらう。私に言はせればこの位の程度の解釋なら之を逆に春秋を編年家左傳を記事家としても一向差支へなさうに思ふ。かゝる弱點のあるは明に劉知幾の分類に大して論理的な根據

のない證據である。

國語家はその元祖は國語と戰國策とである。後に之を眞似たものは孔衍の春秋時國語と春秋後語及び司馬彪の九州春秋があるだけである。晋の中葉以後僞僭の國が多く現はれた時代、即ち當然國語家の體で書くべき時代にも人は皆紀傳や編年を用ひて國別の體を用ひなかつたのはこの體の後世廢れた事を意味してゐるとしてゐる。之は成程その通りだが之だけの話では實際上廢れたといふだけで國語家が後世に不適當であるといふ證據にもならない、又記傳や編年が特に存在價值があるといふ事にもならない。併し乍らこゝに於ても後世行はれないものは兎に角存在價值がないのだといふ劉知幾の態度ははつきり窺ふことが出来る。

史記家と漢書家の項に至つては劉知幾の御都合主義を最もよく暴露してゐる。史記家の特長を通古とし、之を襲ふ者に通史、科錄、南北史があるとするのはいゝ。漢書は斷代で後の正史は皆之を襲ひ最も體制の整つたものであるといふのもいゝ。史記が舊記や雜言を採つてゐる

のを責めるのも先づ認められる。唯史記が紀傳體を始めた功績に對しては一言も賞めず、剩さへ紀傳體の缺點は總べて史記の項に於て述べて、「分以紀傳。散以書表。每論家國一政。而胡越相懸。叙君臣一事。而參商是隔。此其爲體之失者也」とするに至つては餘りにも得手勝手な言ひ草だといふ他はない。何となれば漢書も同じく紀傳體である限り之と同じ缺點を持つてゐる筈だからである。

併し乍ら翫つて考へて見ると史記家は必ずしも史記そのものではない、史記家とは愚作である通史や科録や南北史によつて祖述された様な一群の通古紀傳體であるといふ辯明も成り立たないわけではない。それにしても史記そのものの功を餘り無視した不明は蔽ふべくもなく、後に鄭樵によつて痛烈に攻撃されたのも至極無理からぬ所である。

かくの如く述べ來れば、讀者は劉知幾が六家篇を設けた所以も、又彼が六つの家に分類した意圖も凡そ理解出來たことと思ふ。

註① 例へば「記言」「記事」の文字は外篇擬古篇に「蓋古之古

史通の六家二體の論に就て

史。區分有二焉。一曰記言。二曰記事云々」とあり、「編年」は六家篇左傳家の項に「孝獻帝始命荀悅。撮其書爲編年體。依左傳。著漢紀三十篇」とある。「紀傳」に至つては特に例を擧げる迄もなく到る所に其字が見受けられる。

② 内藤虎次郎、史學史稿本。

③ 私の父は六家の分類に就いて「隋書經籍志がその時代の現在に依つて史書を分類せるに對し劉知幾の分類は從來の歴史の由つて起る由來よりしてゐる」ことを史學史稿に一寸述べてゐる。が併しその他の點に於ては多く浦起龍の考へを踏襲してゐる。

④ 第二節註①參照（二七八頁）。

四 二體の内容に就て

先づ史通の二體篇の内容を要約して見る。

古來の書で史體として備つてゐるものは左傳と史記とである。後來の諸書はいづれもこの二者の範圍を出でない。事を以て日月歲次にかけ、中國外夷共に年を同うし世を共にして目前にあらはれ、理は一言にして盡き、語は重出することがない、これがこの長所である。短所は人物の國政に關係してゐる者は詳しいが、野に隠れてゐる者は如何に賢人であつても記されないとはいふ點であ

る。史記は紀を以て大端を擧げ、その他細いことは傳表書に遺漏なく記されてゐるのが其長所である。同一の事が分れて數篇に聯絡なく記され、或は人物の時代の前後せる者が同列に並んで書かれたりするのが其缺點である。荀悅の漢紀及び班固の漢書は夫々左傳史記の短を補つたものである。だから班荀二體は共に存すべきものでいづれかの一つを廢することは出来ない。此等を倣つてその出來榮えのよかつたものに王隱、虞預の晋書(記傳)、干寶の晋記(編年)、徐沈の宋書(紀傳)、裴子野の宋略(編年)等がある。

抄浦起龍はこの二體を以て編年、紀傳の二體を指すとしてゐる。これは一寸考へれば如何にもその通りであつて何等疑問を挾む餘地が無い様に見える。併し乍らこの解釋は動もすれば劉知幾が將來採用すべき史體に編年體紀傳體の二體があると論定したものと誤解され易い。所が實際は彼は紀傳體のみを採用して専ら紀傳體の歴史の作り方に就き論じてゐる。さうだとするとこの二體は必ずしも採用すべき完全なる史體としての二體ではないの

ではないかといふ疑が生じる。私の考へる所ではこの二體は從來の史體の中、その方法の長所を取つて以て採用するに最もいゝ二つの型であつて、この二つの長所を併せたものが即ち自分の後に述べる史體であるといふ意味だらうと思ふ。浦起龍のいふ如く之は編年紀傳といふ如き一つの形式そのものを指すのではなく從來あつたものの中から最も近代的なるもの二つを抜き出したものであらう。そこで彼劉知幾の考へでは大體に於て紀傳體の形式を採用し、編年體の精神は之を本紀の中に應用すべきであるとしたのである。内篇本紀の項に「蓋し紀の體たる猶春秋の經の如し。日月に繫けて以て歲時となし、君上を書して以て國統を顯はず」といひ又「陸機の晋書三祖を列紀するに直に其事を序し、竟に編年せず。年既に編せず。何の紀か之有らん」と言つてゐるのはその證佐であると思ふ。

一體私の考へでは編年紀傳の文字がそのまゝ、史體の名前に用ひられる様になつたのは通鑑が出来て以後の事ではなからうかと思ふ。劉知幾自身もこの言葉を盛に使つ

てはゐるがそれはいつも「年を編む」といふ意味で乃至は「紀と傳」といふ意味で使つたもので未だ之をそのまゝ史體の名前として意識的に用ひる所まで行つてゐないのであるまいか。それと同様に通史斷代の二體の考へも鄭樵に至つて始めてはつきり理論的に自覺されたもので、劉知幾が通史を排して斷代を探つたのは大した深い論據があるわけがなく、當時の風潮が官選の歴史といへば當然斷代であるが如くなつてゐたのに従つたものではないかと思はれる。その證據には史記家の項に於ても彼は何故古今を通じることが悪いかといふ事は一言も言つてゐない。

結 語

以上述べた所によつて私は史通の六家二體は劉知幾が己れの理想とする史體を根據づける爲に設けた二篇であること、及び六家の分類に至つては單に歴史的根據によつたのみで別に之といふ深遠な史觀や歴史論があつたわけではないことを明にした積りである。但しこの歴史的根據によつたといふことはたとひ論理的には大した意味

はなくともこの分類法の存在價值をある程度迄高めるものであるともいへる。①更に又彼が理想とした史體がそのまゝその時代の風潮の反映であることも、彼がそれ迄の時代の史學の風の結論的存在であるといふ意味に於て必ずしも意義のないことではない。何となれば私は何も劉知幾が史家として偉かつたかどうかを問題にするのではなく彼の存在をその時代との關聯に於て特に興味深く感ずる者であるからである。

註① 歴史的根據といふ意味はかく／＼の前例があるからこの事は現在爲す價值があるといふ、あの支那人が最も得意とする價值づけの手段の謂である。物事の價值を論理的によりも寧ろ歴史的に證明するといふ態度は從來の支那人の最も顯著な特長の一つであると私は思ふ。價值確立の手段としてかゝる方法がいゝか悪いかは別問題として、支那人のかくの如き價値の表現方法及かゝる方法によつて表現された價値——それは必ずしも論理によつて表現されたものと全く一致しないかも知れない——の中に案外吾々が今迄見落してゐた様な新しい世界がないとも限らない。